

序

今度、昭和45、46年度の調査研究の成果を、事業概要第2号として発行することになった。

ここ10年間の陸奥湾の水揚げの状態をみると、昭和35年には総水揚げ量は30,000トン位であったものが年と共に下降し、42年には35年の約半分16,000トン位しか水揚げされないようになった。その後急激に回復して、45年には再び30,000トンに達するようになった。その主なものはホタテガイを中心とする貝類の水揚げがのびたことによるものである。

陸奥湾のホタテガイ漁業は着々と軌道にのり、昭和45年には年産11,770トン、金額にして17.3億円に達し、陸奥湾の総水揚げ量、金額共に40%位を占めるようになった。又ノリ、ワカメ等の海藻類は横ばい、ナマコ等の水産動物は徐々に上昇をたどっているが、魚類は36年頃には70%位を占めていたのが、45年には30%以下に下降している。

その資源の回復を目的として、昭和45年に陸奥湾栽培漁業開発調査ということで、魚類、甲殻類の人工種苗生産、生態調査及びニジマス、サケ、ヒメマス等鮭鱒属の海水馴致の調査が始まった。その後昭和46年に日本海、同47年に太平洋北区で栽培漁業基本調査が始まり、益々この魚類関係の研究がさかんになってきた。

従来当センターは、海藻類、貝類の増養殖に関する基礎研究を主要課題としてきたのであるが45年に魚類、甲殻類をとりあげたことは、当センターとしてこの方面への研究に第一歩をふみ出した年ということと特筆すべき年と考えている。

私は事業概要を私達センター研究者の思想、技術段階を示す道標であると考えている。その当時どんなことを考え、どんなことをやったかを記することによって、私達の発展の過程を知ると共に今後の発展への示唆を得るものと確信している。

皆様方の御叱声、御批判を賜りますれば、誠に幸である。

昭和47年12月

青森県水産増殖センター

所 長 津 幡 文 隆